

**「宇宙船ビーグル号の冒険」 A. E. ヴァン・ヴォークト 著；沼沢治治訳 創元社
2017年7月発行（創元SF文庫）**

高専で何回も就職担当教員を務めていましたが、最も企業が欲しがる人材は、例えば野球部やバスケットボール部などの運動部出身の学生です。成績は問われません。明るく協調性があればほぼ百パーセント合格です。

それに対して、趣味が音楽鑑賞、読書、パソコンなどとは記述されていない履歴書の持ち主は、面談や面接で「暗い感じがする」「元気がない」などと言われて入社を断られたりします。私は個人的にも相当の本を読んだ読書家を知っていますが、「百聞は一見に如かず」と似た「百冊の読書は一つの経験に負ける」という言葉が頭に浮かんできます(私が思いついて今、作りました)。

確かに、9回裏2死満塁ツースリーの局面でホームランを打たれた野球選手の経験を持つ学生が、その後の人生で、つらい局面でも対処できる人間になるのはわかります。それでも言いたいのは、もっと常識外のつらい経験をした時、読書などで教養がある者のほうが、やはり壊れたりパニックを起こしたりしないのではないか、ということです。

一般に文学者から目の敵にされるSF小説ですが、それでも究極の世界を味わうことで、困難に負けない強い主人公の姿を頭に入れることができます。

ビーグル号は軍人と科学者千人を乗せた宇宙探査用の船ですが、宇宙生物を船に乗せては、逃げられてひどい目にあったり、他所の星からテレパシーで歓迎されては、感覚が違うせいでヒトにはそれが精神攻撃になってしまって痛かったり、一つの銀河を支配しているガス状の生物に、オレが生きたために、オマエの星系に行ってオマエらを滅ぼすからついて行くね、と船につきまとわれたのを振り切るために、何も無い宇宙空間の虚空を何年間も飛んでみたりと、さんざんな経験をします。昔エイリアンという映画がありましたが、その発想もこの本からも得たものです。

さて、ビッグバン以前の宇宙を支配していた一匹の生物と、軍人と千人の科学者が行う船内での悲惨な死闘などという、これ以上の戦いの描写は、小説でもあまり読んだことがありません。最後は老日本人科学者が、これぞ学者というある発想でピンチを切り抜けています。勉強になります。加えて人間臭いじめや組織の問題もあり、負けずに解決する若き主人公の強さは、古典的名作として今も輝きを放っています。

疑似体験しておく、何があっても貴方も強く生きられます。